



はじめに

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（以下ACCU）は、多様な文化が尊重される平和で持続可能な社会の実現を目指して、アジア太平洋の人々と協力し、教育と文化の分野における地域協力・交流活動を推進してきました。その一環として、ACCUは25年にわたり、日本、韓国、中国、タイ、インドの教職員を対象とした「初等中等教職員国際交流事業」を実施してまいりました。

本事業は、初等中等教育に携わる教職員を対象に、国や地域を越えて「異文化を通して学ぶ」、「出会いから学ぶ」という二つの「学び」を通して、これからの学びの在り方を問い直し、協創する機会を提供する教職員国際交流事業です。

令和7年度は、「まさに今求められる教職員国際交流」を模索するため、「『あたらしい』学びを考える」、「新時代に求められる教職員像を考える」をテーマとしてプログラムを実施しました。

本事業は、教職員一人ひとりが多様なアクターと協働し、未来を担う「Change Makers」として学校内外で活躍するきっかけを提供することを目指しています。参加者は、既に国際交流に積極的に取り組んでいる方から、これから取組を始める第一歩を求める方、さらには国際交流が初めての方まで、幅広い背景を持っています。

本事業が四半世紀にわたり継続してきた背景には、教職員の皆様をはじめ、協力機関、専門家の皆様と国際交流の意義を共有し、共に歩んできた積み重ねがあります。本報告書では、各プログラムの実施報告、過去の参加者のその後の取組、事業評価などをまとめています。皆様に本事業への理解を深めていただくとともに、国際交流に取り組む皆様の新たな挑戦を後押しする一助となれば幸いです。

最後に、本事業の実施にあたり温かいご支援とご協力を賜りました関係者の皆様に、心より感謝申し上げます。

令和8（2026）年3月
公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）
国際教育交流部



目次

- 01 はじめに
- 03 事業概要及び目的
- 05 令和7年度招へいプログラム実施報告
- 13 参加後に広がる教育実践と国際交流の波及
- 17 令和7年度事業の成果及び中長期的インパクト評価
- 25 資料編





事業概要



ACCUでは、2001年からユネスコ（UNESCO）及び国際連合大学（UNU）の事業として初等中等教職員国際交流事業を実施してきました。2018年度からは文部科学省の事業として引き継がれ、25年以上にわたり継続して実施しています。本事業は、国内外の教職員を対象とした国際交流事業であり、以下の二つのプログラムで構成されています。

- ・海外教職員の日本への招へいプログラム：ACCUが主体として実施
 - ・日本教職員の海外への派遣プログラム：海外協力機関の協力により実施
- 交流国は2001年の韓国を端緒として、2002年に中国、2015年にタイ、2016年にインドが加わり、現在は4か国と連携し、アジア各国へ交流の範囲を広げています。

令和7年度の事業テーマ

教職員の役割が多様化・複雑化する現状を踏まえ、「『あたらしい』学びを考える」「新時代に求められる教職員像を考える」をテーマとして事業を実施しました。

招へいプログラム・派遣プログラムでの主な活動

各プログラムは、オンライン及び対面の両形式で実施され、対面プログラムは、1週間程度の日程で行われます。

- ・文部科学省及び専門家による各国の教育事情についての講義
- ・学校等の教育機関への訪問
 - 授業見学、施設見学、参加教職員による文化授業、教職員交流会、給食試食
- ・ホームビジット
 - 地域の一般家庭を訪問し、夕食を共にしながら交流
- ・教育・文化施設への訪問
- ・教職員交流会
 - 教育に関する議論、教職員間のネットワーキング
- ・アクションプラン作成



ACCUが実施する「教職員国際交流事業」の特徴

本事業は、授業計画や教育実践のスキル習得を目的とする「研修」とは異なり、交流を軸にした学びを重視する点に特徴があります。

具体的には、「異文化を通して学ぶ」「出会いから学ぶ」という二つの「学び」を通して、これからの学びの在り方を問い直し、協創する機会を提供しています。教職員同士の対等な交流を通じて、これまでの教育実践を振り返り、今後の実践につながる気づきや問いを生み出すことを重視しています。

事業を構成する4つの要素

本事業は、「しる（知識）」、「みる（経験）」、「つながる（交流）」、「つくる（実践）」の4つの要素で構成されています。これら4つの要素を段階的に経験することで、参加者は学びを個人的な知識と経験にとどめず、教育現場での具体的な実践へと発展させます。

「しる」、「みる」、「つながる」はオンラインと対面の両形式で実施されるプログラムでの活動内容です。「つくる」はプログラムの経験を基に、参加者が各地域や教育機関において実践する取組を指します。プログラム終了直後には、各参加者が取組の計画となるアクションプランを作成します。

作成されたアクションプランは、プログラムの枠を越え、韓国、中国、タイ、インド、日本の5か国の全参加者が互いにアイデア及び成果を共有できるよう、ACCUのHPにて公開しています。

事業で目指す姿

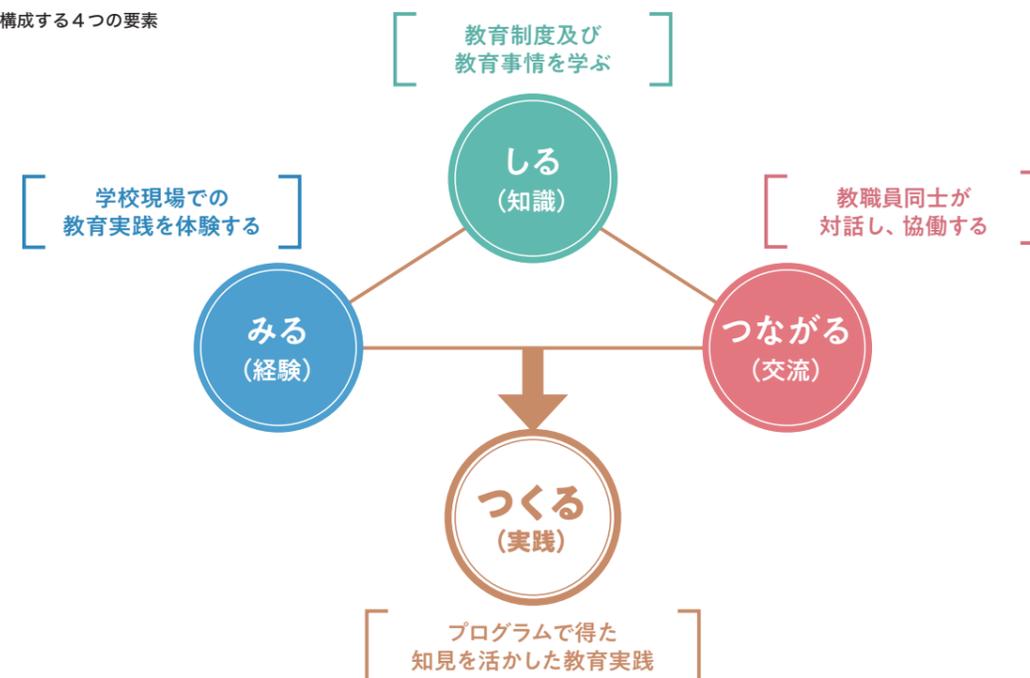
ACCUでは、本事業を通じて教職員が次のように変容することを目指しています。

- 「教職員」が教育現場で国際交流を推進する
- 「教職員」が国内外の多様な人々や文化に触れて自己相対化を図る
- 「教職員」がChange Makersとして社会で活躍する

中長期的評価分析及びフォローアップの強化

令和6年度からは、事業評価及びプログラム終了後のフォローアップに一層注力しています。プログラム前後の参加者の意識変容や、教育現場での国際交流の実践状況、Change Makersとしての学校内外での取組を中長期的に追跡しています。これにより、事業の短期的成果にとどまらず、教育現場への定着度や波及効果を把握することを目指しています。詳細については、「令和7年度事業の成果及び中長期的インパクト評価」の章でご紹介します。

事業を構成する4つの要素



令和7年度招へいプログラム実施報告

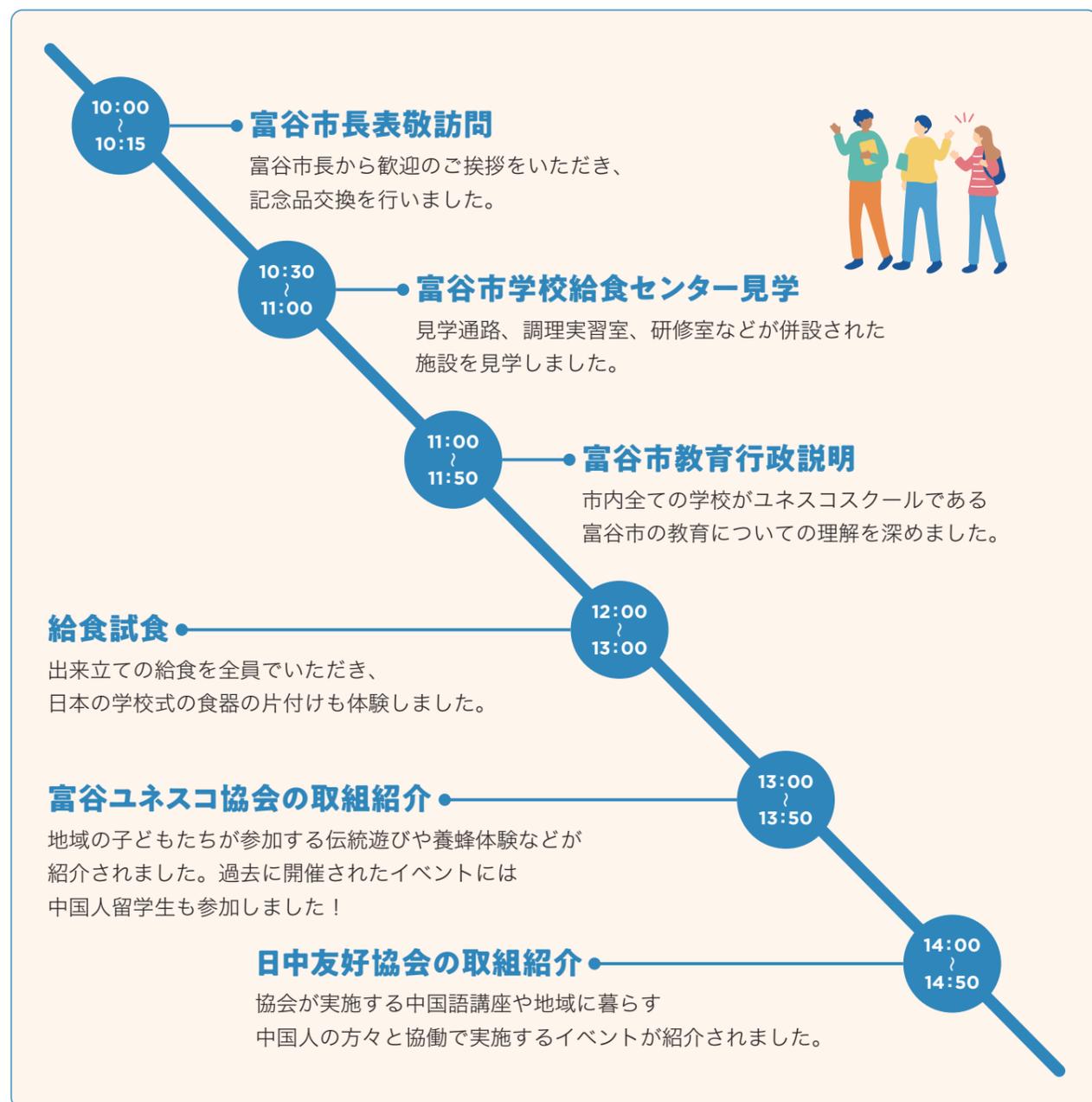
各招へいプログラムの活動日程（オンライン・対面）は資料編に掲載しています。

中国教職員招へいプログラム

2025年9月9日、9月16日～22日に、初等中等教育に携わる中国教職員及び教育行政職員24名を宮城県に招へいしました。

富谷市教育委員会訪問時の1日の流れ

富谷市教育委員会の訪問では、市の教育行政のみならず地域に根差して活動する団体の教育活動を知る機会となりました。



プログラム参加者の声

中国教職員

互いの長所を学び合い、実践に生かしていくことが大切だと感じました。教育の未来は、国境や民族を越えた交流の中でこそ開かれていくものだと思います。

ホームビジットでは、ホストファミリーと親しく交流し、その温かいおもてなしと細やかな心配りを感じることができました。このような文化体験を通じて、教育交流は制度を学ぶだけでなく、文化同士の対話でもあることに気づかされました。互いの文化的背景や考え方を真に理解してこそ、より深いレベルでの相互学習と相互理解が実現できると思います。

受入れ機関

中国の先生が昼休みに通訳の方を交えて生徒とおしゃべりをしてくださいました。中国の先生から学校のトイレが清潔であると伝えられ、自分たちがトイレを掃除しているのだと、とてもうれしそうに話していました。改めて生徒たちは、清掃活動の意義を認識することができました。

ホームビジット受入れ家庭

当初長いと思っていた3時間があっという間に過ぎ、大変楽しく有意義な経験をさせていただきました。会話の不自由は、翻訳アプリの活用であまり気になりませんでした。学校の先生方だけに、学校や学生の話では熱く語られていたのが印象的でした。



写真上：富谷市教育委員会への訪問（手遊びでストレッチ）
写真下：宮城県塩釜高等学校とも連携して授業を実施している地元企業での昼食

活動ピックアップ 「大学訪問で深まる『しる』と『みる』」

訪問団は、プログラム後半に宮城教育大学及び東北大学を訪問しました。宮城教育大学では、教育学部の市瀬智紀教授と、日中の教育制度及び教員養成をテーマに意見交換を行いました。学校現場を見学した後だったこともあり、参加者からは具体的な質問が次々と出され、議論は自然と深まっていきました。東北大学では、ナカサト ローレン助教による仙台市の外国籍児童の教育事情に関する講義を、中国からの留学生とともに受講した後、キャンパスを散策しながら留学生と交流しました。落ち着いた大学の雰囲気の中、留学を決めたきっかけや学生生活の話に耳を傾け、終始、会話の弾む時間となりました。中国教職員からは、「留学生との対話を通じて、彼らの異文化学習体験に触れ、インクルーシブ教育の重要性を改めて実感できました。」との声が寄せられました。



東北大学での集合写真

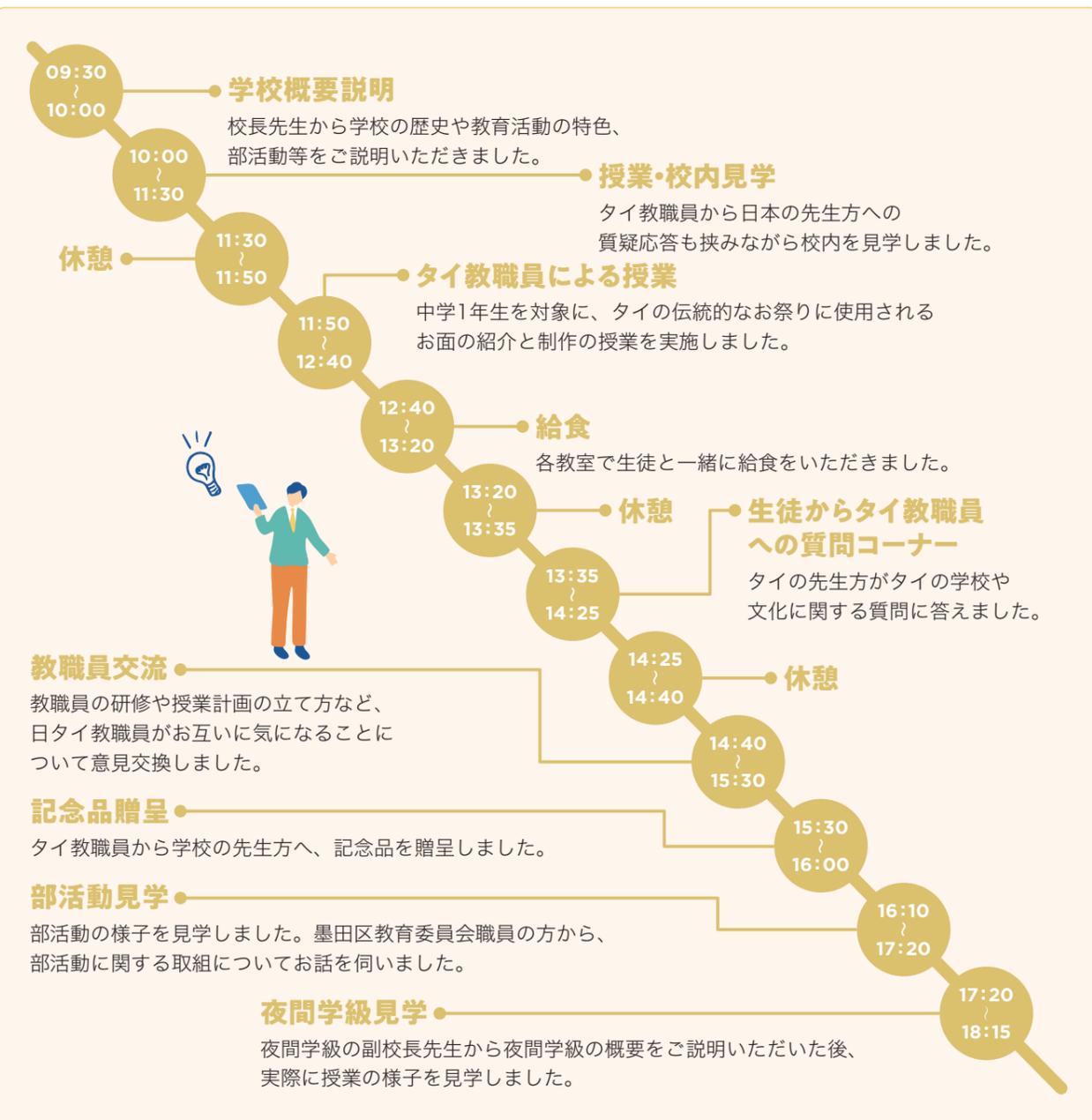


タイ教職員招へいプログラム

2025年9月25日、9月30日～10月6日、2026年3月7日に、初等中等教育に携わるタイの教職員及び教育行政職員10名を東京都へ招へいしました。

墨田区立文花中学校訪問時の1日の流れ

学校訪問では、日本の教職員及び児童・生徒との交流、各校の特色ある取組を通じて、今年度の事業テーマについて考える機会をご提供いただきました。



プログラム参加者の声

タイ教職員

学校訪問の中で特に感動したのは、日本の学校が日々の教育活動を通じて、児童・生徒に責任感と他者を思いやる心を育てていた点です。教室の清掃、給食、地域との連携などを通じて、学校内外での学びを充実させていることがよく分かりました。また、インクルーシブ教育についても学ぶことができ、これらをタイの教育現場に応用することで、児童・生徒の創造力や公共心を育み、社会に貢献できる質の高い市民を育てることができると感じました。

受入れ機関

タイの先生方と直接お話しできたことは、子どもたちにとって貴重な経験となりました。後日、タイの先生方から教わった歌や踊り等を子どもたちが家庭でも披露したことも聞いています。

タイ教職員の皆様の教育に対する熱意に感動しました。また、日タイ両国の教育制度や教育事情の違いを学ぶことができ、参加した本校の教員からも「とてもいい刺激になりました」という感想がありました。

教職員交流会参加の日本教職員

日タイ両国の先生方との交流から、日頃の仕事を振り返って新しい視点を得ることができました。また、新たな文化交流のコネクションが得られて大変有意義な時間でした。



写真上：墨田区立文花中学校でのタイ教職員による授業「お面制作」の様子
写真下：東京国立博物館訪問

活動ピックアップ

「日タイ教職員が考える『インクルーシブな学校』とは？」

対面プログラム期間中に開催した日タイ教職員交流会では、タイ教職員10名と日本教職員10名が集い、教育に関するディスカッションや文化交流をしました。ディスカッションでは、各参加者の所属機関における取組や状況等について意見交換する中で、「『インクルーシブな学校』とはどんな学校か」、「『インクルーシブな学校』の実現に向けて必要なこと」について話し合いました。「インクルーシブな学校」については、「すべての子どもたちが学ぶことのできる学校」や「一人一人のニーズに寄り添った教育活動が可能な学校」といったアイデアが出ていました。また、それを実現する上で、学校内外の連携や、教員の資質向上の機会促進、多様なバックグラウンドをもつ子どもたちを受け入れる基盤づくりなどが必要であるという意見が挙がりました。本交流会を通じて教職員ネットワークも構築され、日タイ学校間交流の実現等へと発展しています。



日タイ教職員交流会の様子



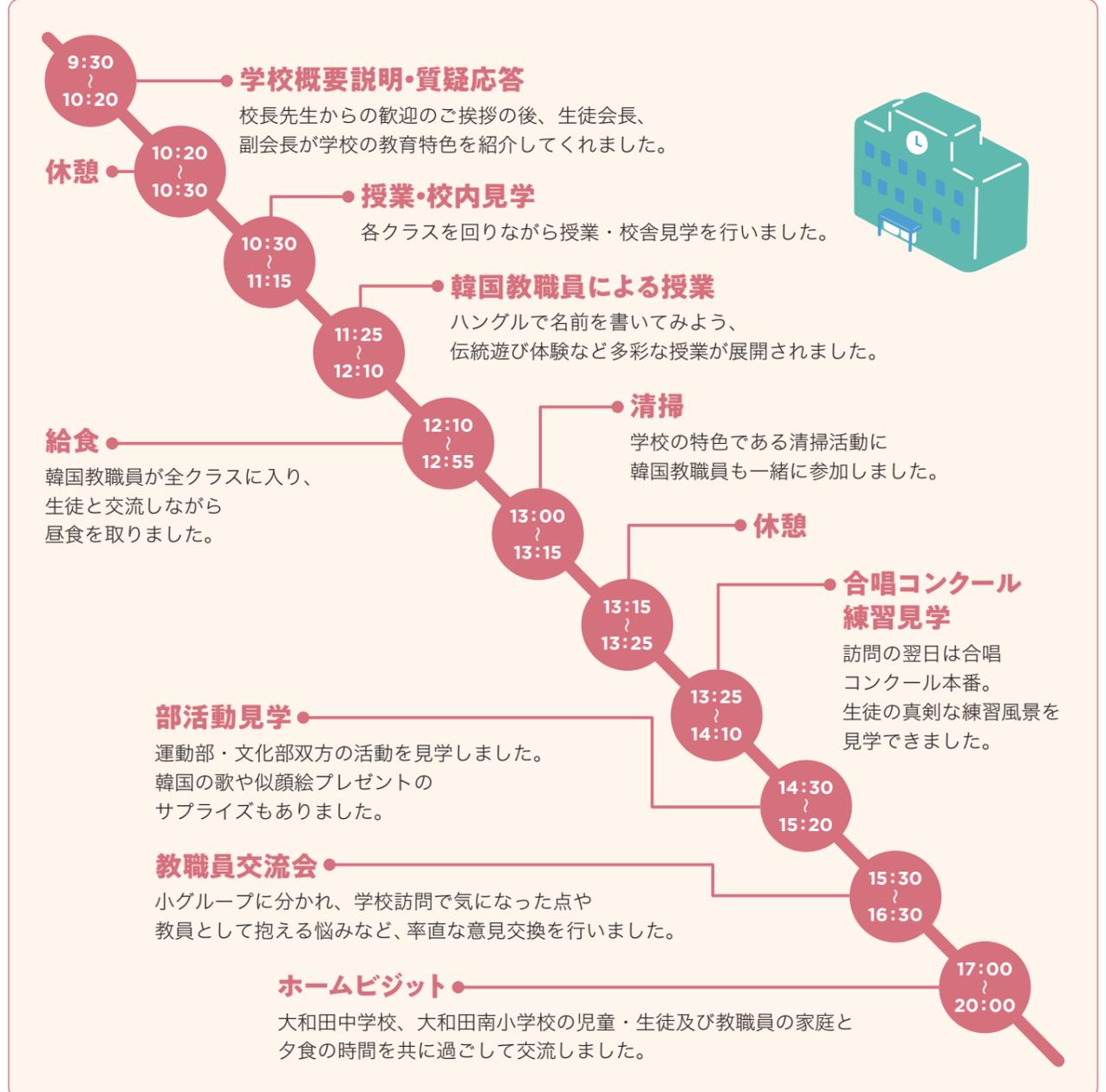


韓国教職員招へいプログラム

2025年10月24日、11月3日～11月9日、2026年2月7日に、初等中等教育に携わる韓国の教職員及び教育行政職員59名を千葉県及び東京都に招へいしました。

八千代市立大和田中学校訪問時の1日の流れ

授業、部活動及び学校行事の見学、児童・生徒、教職員との交流など日本の学校教育について多面的に学ぶ機会をご提供いただきました。



プログラム参加者の声

韓国教職員

日本の学校での児童・生徒の自律性と責任感を尊重する授業の雰囲気、そして教職員が子ども一人ひとりを細やかに気遣う姿が印象的でした。また、授業後に実施された教職員交流では、互いの教育哲学や悩みを共有し合い、韓国と日本が教育を通じて共感の輪を広げられることを感じました。

受入れ機関

韓国の先生方に行っていた授業は、子どもたちには大変好評でした。授業を通して文化を理解するとともに、先生方の温かさを感じることができたようです。また、韓国の先生方に本校の取組を見ていただいたことで、逆に本校の教育活動について振り返るよい機会になりました。韓国と日本の教育問題の共通の話題も挙がり、悩んでいることは共通していることも見え安心しました。

ホームビジット受入れ家庭

韓国の先生は皆優しく、積極的に話しかけてくださり本当に楽しかったです。簡単な英語とアプリを使った韓国語のやりとりでしたが、言葉の壁はあっても心が通う貴重な経験ができました。子どもたちも韓国に行ってみたい！と興味を持ったようです。



写真上：麹町学園女子中学校・高等学校での書道体験
写真下：大和田中学校での韓国教職員による文化授業

안녕하세요

活動ピックアップ 「教育連携が広がる日韓教職員交流会」

日本の教職員を迎え総勢約90名で実施しました。午前は東京学芸大学岩田康之教授による講義を起点とし、現代社会における教師の役割についてグループで議論しました。午後は自由交流の時間を設け、意見交換や今後の持続的な学校間交流へ向けたネットワーク構築が活発に行われました。最後には韓国教職員による伝統芸能「カンガンスルレ」の踊りと歌が披露され、日本教職員も加わって全員で踊り大変盛り上がりました。参加者からは「教育を自国の中だけで考えるのではなく、韓国をはじめ様々な国の教師の方と共に考える視点をもつことが大切だと実感しました」、「現場での悩みと教育方式について率直に意見を交わすことができました。教室ですぐに使えるアイデアを得られたことや、教育に対する連帯感を感じられた点が特に記憶に残っています。」といった声が寄せられ、両国の教育分野での連携可能性がますます広がる一日となりました。



日韓教職員交流会の様子

インド教職員招へいプログラム

2025年11月1日、11月17日～11月23日、2026年1月10日に、初等中等教育に携わるインドの教職員及び教育行政職員9名を、群馬県、埼玉県及び東京都に招へいしました。

群馬県立尾瀬高等学校訪問時の1日の流れ

群馬県の豊かな自然の中にある高校を訪問し、教育実践や施設を見学するとともに、日本の家庭を訪問するアクティブな一日でした。



プログラム参加者の声

インド教職員

日本という科学、数学、スポーツでよく知られた国の、実際の教え方、学び方の習慣を観察することができました。私は児童・生徒たちの規律、責任感、学習に対する強い集中力に非常に感銘を受けました。そのような素晴らしい学習者を育むようなシステム、教員に対する尊敬の姿勢、そして日々の学びに対する発展的なICTの使用を目にしたことは、勉強になりました。

受入れ機関

インドの先生方が非常に意欲的であったことが印象的です。資料、説明、見学を通して、インドでもだいたい同じという発言がありました。文・理の分け方や習熟度別の分け方など共通点も多かったようです。

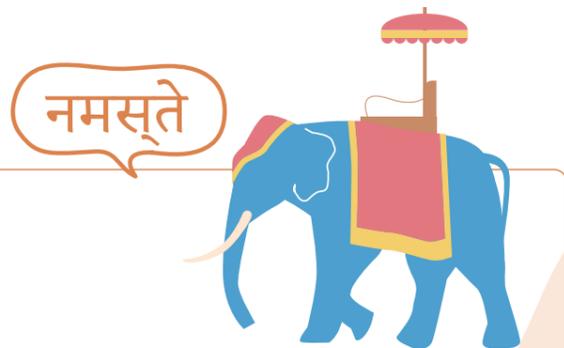
日本の先生方の普通の教育は、他の国からも認めてもらえる教育なのだという自信になったようです。地域との交流から得るものは大きいということを再認識しました。また、このプログラムを企画した私にとっては正直大変なこともありました。協力的な職員が多く、国際交流が好きな先生方がこんなにいたのだという意外な事実気づきました。

教職員交流会参加の日本教職員

普段接することのできないインドの方々と交流することができ、幸せな気持ちです。また、成田先生の講義によって文化や言語、宗教の壁を超えるのに、詩は大きな力をもつと気づかされました。最後は、整った、わかりやすい言葉より、その人の熱量や人間性だよと教育者として勉強になりました。また、今後ぜひ他の国の人たちとも交流したいと思います。



学校見学
(自然豊かな敷地内)



活動ピックアップ 「ある視点」

2025年11月22日に実施された日印教育交流会のファシリテーターを務めた東京学芸大学大学院教育学研究科個人研究員 成田喜一郎氏は、インド、日本の先生19名を「『あたらしい』学び」の世界へと誘いました。教育を「水」のあり様に準え、形なき水が形を生み、間（あいだ）をつくるように、日印教育交流会は、講義とワークショップの二項を越える「第三の時間」として発揮されました。

従来のリフレクションは感情の吐露または論理的振り返りのどちらかに偏る傾向にあるに対し、成田氏からは脳の異なる機能系の役割を背景に、「学んだ事象・事実」と「想像力や閃き」に論理と証拠を付加し昇華させる認知のあり方としてのリフレクションが提示されました。参加者の内的準備や心理的安心感を優先し、参加の自律性も担保するというものです。沈黙や違和感を「流れ」として扱うケアも内包し、参加の自由と学びの深度を両立させ、信頼と主体性を育む場へ転換していきました。日常から離れた異空間で参加者は聴き合い、語り合いました。



日印教育交流会にて「『あたらしい』学び」を考える

参加後に広がる教育実践と国際交流の波及

プログラムに参加した教職員は、それぞれの教育現場においてプログラムで得た経験を生かし、「つくる」取組を継続しています。参加そのものにとどまらず、参加後の継続的な実践こそが本プログラムの重要な特徴です。本ページでは、過去の参加者による多様な取組と、その広がりを紹介します。

お面文化を通じた日タイ交流の取組



Bannakhok School, Loei province, Thailand
Nitcha BUDDEESUWAN先生

●参加したプログラム
2025年度 タイ教職員招へいプログラム



タイ教職員招へいプログラム後の実践として、訪問した新宿区立愛日小学校とのオンライン交流を実現しました。「Cultural Mask」をテーマに、タイの祭りで使用される3人の精霊のお面（Phi Ta Khon、Phi Khon Nam、Phi Bung Tao）を取り上げました。本校の児童はお面の芸術的・精神的側面について紹介し、日本の児童は日本の伝統的なお面の歴史や文化的背景を説明してくれました。その後、オリジナルのお面を作って質問し合い、お互いへのメッセージを書きました。最後にお面をつけて踊りを披露し、振り返りで交流を締めくくりました。今回の日タイ学校間交流を通じて、タイの地方の学校においても国際交流が実現可能であることを証明し、タイのLoei県全域の学校向けパイロット教育モデルとしても選出され、全国各地に実践が発信されました。

その他にも、日本の教育カリキュラムや、他者を尊重し社会的責任を果たす姿、教育と先端技術の融合に焦点を当て、訪日プログラムで得た知見を幅広く教職員に発信しました。

日本との交流によって、子どもたちは英語でのコミュニケーション能力、異文化理解力、主体性、学習意欲が著しく高まっています。日タイ児童間の絆も深まり、日本語の学習意欲も高まっていることを契機に、私の英語の授業では日本語も取り入れ始めています。

他の教職員からも、お面を活用した国際交流について、「タイの児童が伝統文化に対する理解を深め、教職員と児童双方の学びの意欲を高める上で非常に意義がある」と大きな反響がありました。教職員の考えや姿勢にも大きな変化をもたらしており、知的探究心と社会的責任感を育む「Learning Leaders」となることの重要性を考えるようになってきました。

日本との交流の準備には、時差や異なる学事暦の調整、言語面での困難がありました。特に言語の壁については、児童が文化的概念を英語で自信を持って伝えられるよう教材開発から工夫して準備しました。実際の交流から学んだことは、国際協働には言語の完璧さよりも同じ価値観の共有が重要であること、

児童自身が文化の担い手であると感じられるようになると外国語を使う意欲が自然に高まるということです。また、リアルタイムの交流は予期せぬ貴重な学びの機会を生むため、授業計画には柔軟性を持たせることが重要だと感じました。さらに、教師は単に指導するだけでなくグローバル体験のファシリテーターであるべきだと実感しました。

今後の展望として、日本との交流を持続的な学校カリキュラムとして制度化し、更に日本の規範意識とタイの文化的アイデンティティを統合した持続可能な三言語交流モデルを開発したいと考えています。児童と教師が長期的にグローバルなつながりを維持し、持続可能な開発のための教育（ESD）に貢献し続けたいです。



日印学校間交流が広げる学び



ASN Senior Secondary School, Delhi, India
Renuka RAWAT先生

●参加したプログラム
2024年度 インド教職員招へいプログラム



これまでに、埼玉県立越谷北高等学校、立川市立第八小学校及び久喜市立菖蒲中学校とのオンライン交流を実施しました。埼玉県立越谷北高等学校との交流には、本校から約60名の生徒と10名の教員が参加しました。ヒンディー語と日本語を少し交えた交流や、お互いの日常生活の紹介から始まり、小グループ交流の中では、ホームオートメーションシステムや廃棄物のリサイクルと持続可能なマテリアル革新など、STEMプロジェクトの一環で各自が取り組んでいることを紹介しました。生徒間交流を通じて、イノベーション、創造的な発想、学術的な協働が生まれる非常に活気ある場が形成されました。

立川市立第八小学校との交流は、「各国の遊び、栄養、文化交流を通じた健康的な生活の促進」をテーマに実施しました。本校から約150名の児童と7名の教員が参加しました。本校の児童は、ヨガや瞑想などを披露し、日本の児童は、書道道具の紹介や習字の披露等をしてくれました。この活動を通じて、両校の児童が、両国間の文化的共通点と多様性に触れることができました。

久喜市立菖蒲中学校とのオンライン交流では、日印の伝統的かつ広く知られている慣習について、両校の児童・生徒が互いに学び合いました。ヨガや柔道の実演や体験に加え、文化や健康的なライフスタイルの実現に関するディスカッション、各国の祭り紹介なども行いました。菖蒲中学校との交流には、本校から約130名の児童・生徒が参加しました。

本校の児童・生徒からは、日本の同世代の仲間たちと交流することができたことに対する喜びと誇りを抱き、また「自分自身の視野が広がる、充実した体験」であったという感想が寄せられました。文化交流を通じて、子どもたちのみならず関わった教員も心から交流を楽しむことができました。さらに、本校の多くの児童・生徒は、この交流により自信をつけ、コミュニケーション能力が向上し、グローバルな視点から物事を考えられるようになったと話しています。

日印学校間交流は、常に全ての関係者によるご尽力と熱意を必要とします。その中で、日本の学校が意欲的に参加して下さることは非常に嬉しく、やりがいを感じながら交流を企画・実施することができました。そして、令和6年度に参加した「インド教職員招へいプログラム」を通じて日本の先生方とのネットワークを構築・拡大することができ、さらにACCUが参加後

の本校における活動に必要なサポートをしてくださったことで、交流が非常に充実したものとなりました。本校は、日本のパートナー校と今後もより良い関係性を築いていきたいと思えます。また、より多くの日本の学校と連携し、日印の教員同士が協力し、地球市民としての意識と異文化理解を向上・促進するための取組も進めていきたいです。



感動の連鎖反応を世界へ



埼玉県立岩槻はるかぜ特別支援学校
教諭 澤田隆視先生

●参加したプログラム

- 2024年度 日印教職員交流会
- 2024年度 日中教職員交流会
- 2025年度 韓国政府日本教職員招へいプログラム
- 2025年度 日タイ教職員交流会
- 2025年度 日韓教職員交流会
- 2025年度 日印教職員交流会



私は10年ほど前に帝京大学教職大学院でイギリスとスウェーデンの学校を訪問して以来、次はアジアの学校を見たいという思いを持ち続けていました。

令和6年度に日本で行われたインドや中国との教職員交流会に参加し、外国の教育に触れ、教育制度などわからないことが多いインドと、遣隋使・遣唐使の頃からの隣国である中国との違いも感じました。日本での交流会に参加すると自分からも行ってみたい気持ちが強くなり、令和7年度は7月に韓国派遣プログラムに参加することができました。済州島ではサムスン女子高校とボモク小学校で文化授業をしてきました。教職員交流会では勤務校と同じ知的障害特別支援学校である、釜山ソウウ学校のカンピョンイル校長先生の講演後に、特別支援教育について話し合うことができました。

帰国して8月25日には勤務校で希望する教員23名に対して報告会をしました。済州島の閉会式で「島人ぬ宝」を歌った時と同じ「かりゆしウェア」に、同じ名札をして、夢中で1時間話したのを覚えています。

9月4日には中学部3年生の生徒にも報告しました。済州島からもオンラインで朝の会に参加したこともあり、報告後も、「澤田先生、韓国」と話しかけてくれるので「アンニョンハセヨ」と話しています。

夢が叶うと次の夢が出てきて、韓国の知的障害特別支援学校を見たい思いが強くなりました。釜山ソウウ学校のリュドンファン先生と連絡を取り合うことになり、韓国の学校の年末年始の祝日はクリスマスと元旦だけであることがわかりました。9月には、12月29日に4名で訪問させていただくことが決まりました。その頃リュドンファン先生も韓国教職員招へいプログラムで、11月に千葉県に来られることが決まり、やり取りが深まりました。

一緒に夢中になって追いかける仲間との出会いも大きく、ひとりではできないことを実現して、11月の日韓教職員交流会の翌朝には、韓国へ帰る先生方のバスを見送ることができました。

勤務校では火曜日の勤務時間外に数人で勉強会をしていて、韓国のことだけでなく、タイやインドとの教職員交流会のことを話題にしています。

自分の世界が広がって、地球を小さく感じて、世界が平和に

近づいた気がしています。まだ児童・生徒同士の交流が実現できていないといった課題もありますが、いつかアジア諸国の先生方と、「障害があってもどうってことない」と言えるような世界を目指してみたいです。



教員の学びが学校を変える—国際交流の実践から



東広島市立木谷小学校
教頭 藤田有記先生

●参加したプログラム

- 2018年度 韓国政府日本教職員招へいプログラム
- 2019年度 中国政府日本教職員招へいプログラム
- 2024年度 日タイ教職員交流会



ACCUのプログラム参加をきっかけに、国際理解教育の充実を目的とした取組を学校全体で進めてきました。2018年7月には、5・6年生を対象に、韓国での交流を通して学んだことを基にした授業を全6回実施し、約170名の児童が参加しました。9月には3・4年生にも2回の授業を行い、発達段階に応じて文化や学校生活の違いについて伝えました。また、8月には教職員27名を対象に、プログラムの背景、訪問先での学び、今後の学校教育への活用について40分間の報告会を行いました。

さらに、ホームビジットを通して知り合った韓国の蔚山にある彦陽小学校との交流を継続し、9月には同校3年生と本校4年生が英語でオンライン交流を実施しました。互いに英語で質問し合い、「好きなアニメは何ですか」、「好きな日本食は何ですか」など、身近な話題を通して交流しました。また、5年生が韓国語で自己紹介をした動画を作成して送ったところ、韓国から日本語によるあいさつ動画が届き、児童にとって大きな喜びとなりました。さらに、11月には、本校の学習発表会で披露した和太鼓の演奏動画を送ると、相手校からは、学校行事での劇やダンスの写真が送られてきました。同じような行事があることを知るなど、互いの文化を興味深く知ることができました。

これらの取組に対し、児童からは「韓国へのイメージが変わった」、「もっと韓国のことを知りたい」、「実際に行ってみよう」、「ハングルを学びたい」といった感想が多く寄せられました。教職員からも、海外とリアルタイムでつながる授業は、国際理解教育につながり、また英語学習への動機付けとして非常に効果的であるとの声がありました。

オンライン交流では接続がうまくいかない場面や、授業時間の調整など、事前準備に苦労することもありました。しかし、実際に国際交流を体験することは、児童が他国を身近に感じ、違いを理解しようとする意識を高める上で大きな効果があると実感しています。

また、ACCUのプログラムを通じて出会った全国の教職員とのつながりは、現在も続いており、国際交流に限らず、日々の教育実践や課題について、悩みを共有したり、助言し合ったりする大切な存在となっています。

複数回のプログラム参加を通して、学校は、「違いを認め、互いに尊重する教育を日々実践していかなければいけない」と強く感じるようになりました。私が訪問国を訪れ、現地で実際

に触れる中で自身のイメージが変わり、そのことを児童に伝えると、児童たちのイメージまで大きく変わりました。教員の影響力は絶大です。それは、国際教育だけではなく、日々の私たち教員の言動や態度すべてが児童にとって影響力があると改めて感じています。教育の持つ力を信じ、今後も国や文化を越えて共に生きる社会の実現に向け、教育現場で実践を重ねていきたいと考えています。



令和7年度事業の成果及び中長期的インパクト評価

本事業のプログラムアドバイザーである東洋大学社会学部教授の米原あき氏とACCU国際教育交流部は、共同で事業参加者を対象としたアンケート調査を実施しました。本章では、分析結果をもとに令和7年度の事業成果及び過去7年間の事業インパクト評価を整理します。

プログラムアドバイザー
東洋大学社会学部 教授
米原あき氏

比較教育政策学、評価学、国際協力論、人間開発論、社会統計・調査を専門とし、SDGsやESDなど人間開発に関わる取組の評価研究を行う。日本評価学会副会長・事務局長、専門社会調査士。著書『SDGs時代の評価：価値を引き出し、変容を促す営み』（筑波書房）等。

令和7年度事業の成果

本事業の評価の枠組みとして、昨年度よりプログラム評価の手法を導入した（山谷他 2020）。プログラム評価は、ニーズ評価、セオリー評価、プロセス評価、アウトカム評価、効率性評価の5つの領域から成る包括的な評価の方法である（図1）。「結果」だけを見る事後評価とは異なり、俯瞰的な視点から、プロセスをブラックボックス化させない評価を行うことができる。

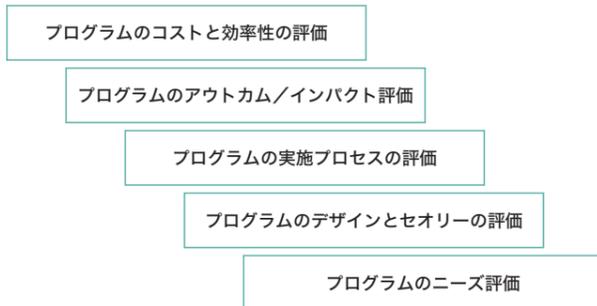


図1 プログラム評価の5領域

プログラム評価の特徴として、セオリー評価の段階でロジックモデルを策定することが挙げられる。本事業の場合、事業担当者や筆者との協働により、右表のようなロジックモデルを策定した。このロジックモデルには、この事業のビジョンと、そのビジョンを実現するための具体的な活動と、それらの成果を可視化するための指標が示されている。これらの指標に基づく評価を行うことで、本事業が、本事業のビジョンの実現に貢献できているのかを確認し、事業改善に繋げることを目的とする。

このロジックモデルに則り、異なる相手に対する関心や知識が高まったのか【質問7-10】、国際交流や国際理解に対する関心が高まったのか【質問11-12】、そして教職員間のネットワークの広がりや、このプログラムから得た学びを教育活動に活かしたり、帰国後に同僚と共有したり、新たな国際交流プログラムを推進したりしようとする意識が培われたのか【質問13①~⑤】を以下で確認する（I.）。また、「『あたらしい』学び」と「新時代に求められる教職員像」についてどのようにアイデアが協創されたのか【質問14-15】は、記述回答のテキストマイニングを通して分析する（II.）。

分析対象となったデータは、執筆時点ですべてのデータが揃っている韓国・タイ・インドからの招へいプログラム参加者78名（韓国59名、タイ10名、インド9名）である。また、日本教職員の派遣プログラムについては、ホスト機関によってプログラム内容が大きく異なるため、分析の対象外としている。

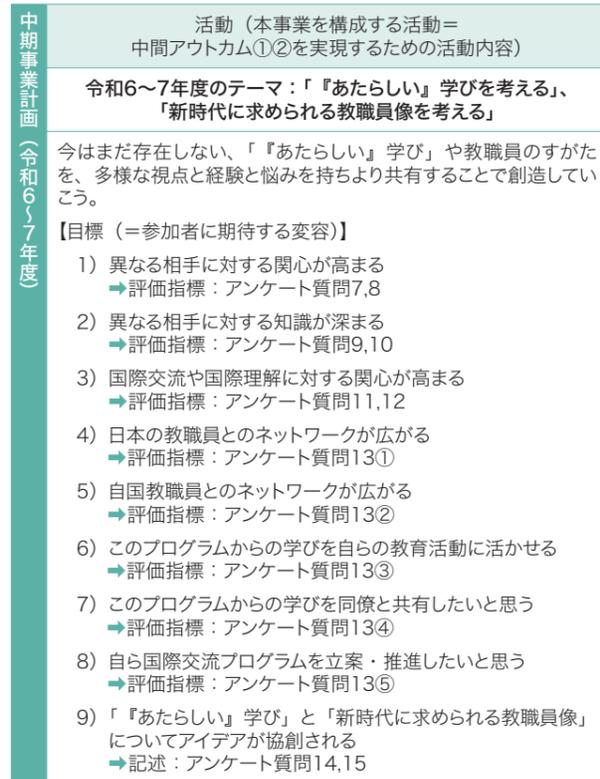
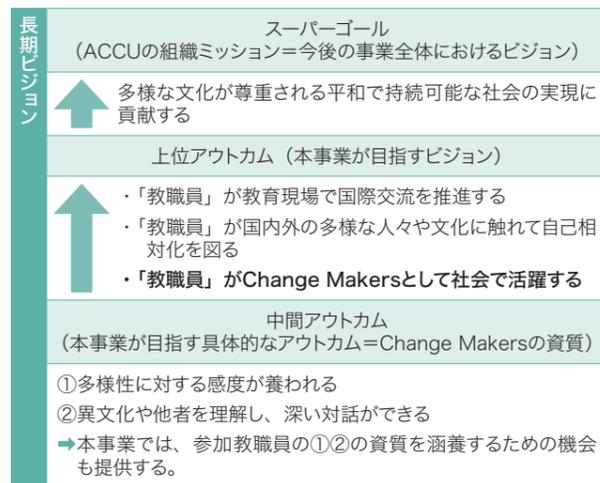


表1 本事業のロジックモデル

I. 定量データの分析と考察

【質問7-12】 関心や知識の高まり・深まり

下表は、それぞれ、日本に対する関心、日本の教育に関する知識、国際交流や国際理解に対する関心がプログラムの前後でどのように変化したかを分析したものである。t検定の結果、いずれも統計的に有意に上昇していることが明らかになり、このプログラムの成果を裏付けていることが分かる。

【問7-8】日本に対する関心			【問9-10】日本の教育に関する知識			【問11-12】国際交流や国際理解に対する関心		
	事後	事前		事後	事前		事後	事前
平均	6.40	5.10	平均	4.05	2.87	平均	6.36	5.38
分散	0.71	2.20	分散	0.49	1.10	分散	0.65	1.95
観測数	78	78	観測数	78	78	観測数	78	78
自由度	77		自由度	77		自由度	77	
t	8.66		t	11.30		t	6.38	
p	<0.01		p	<0.01		p	<0.01	

表2 質問7-12の分析結果（t検定）

【質問13①~⑤】 このプログラムによってもたらされた意識変容

次に、このプログラムが参加者の意識にどのような変化をもたらしたのか（①~⑤）を検討したところ、以下のような傾向が析出された。

【質問13①~⑤】（7件法）

- ①このプログラムを通して、日本の先生たちとのネットワークができた、あるいは広がったと感じる。
- ②このプログラムを通して、自国の先生たちとのネットワークができた、あるいは広がったと感じる。
- ③このプログラムで学んだことを自分の学校の教育活動に応用したい。
- ④この経験を自分の学校の同僚と共有したい。
- ⑤自分の学校で国際交流プログラムを新たに立ち上げたり、促進したりしたい。

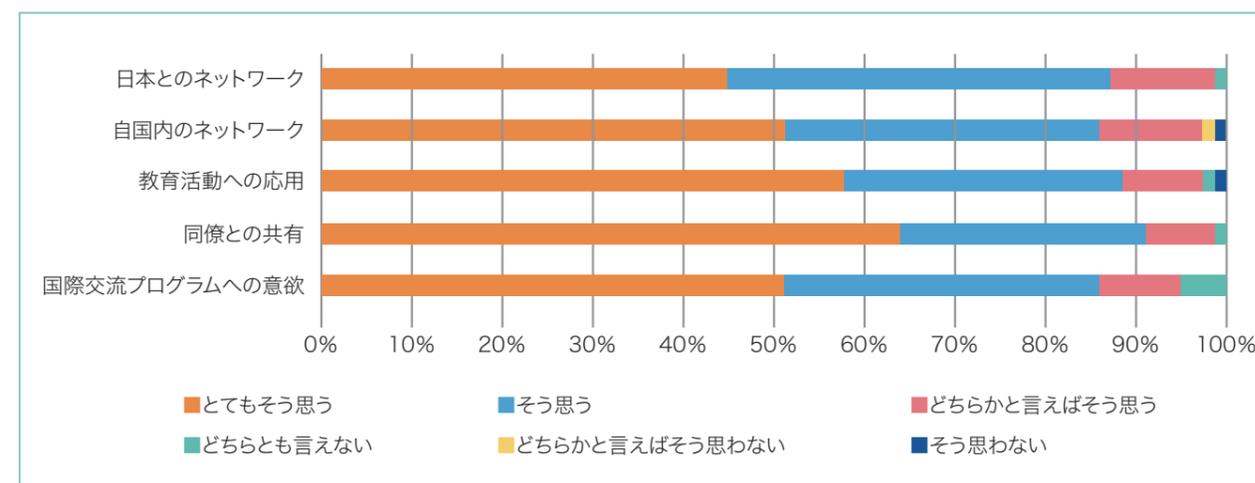


図2 質問13①~⑤「このプログラムによってもたらされた意識変容」の分析結果

これらの質問は7件法で問われたが、「全くそう思わない[1]」については選択した対象者はおらず、上図から明らかなように、大多数の参加教職員が「とてもそう思う[7]~どちらかと言えばそう思う[5]」のいずれかを選択していた。このプログラムが参加者の意識変容に一定の影響を与えていることが分かる。

I.内面・行動の変化

具体的な内面の変化に関する自由記述（Q6）を分析した結果、以下の6つのカテゴリーに整理できた。

内面の変化の類型	具体的な内面の変化
①教職員としての意欲向上	プログラムで得た知見や国内外の教職員との交流から刺激を受け、教職員としての自信・意欲・積極性が向上
②視野の広がり	他国と比較し、自己相対化する視点の獲得、固定観念の打破、多様性を尊重する姿勢の形成、興味・関心分野の拡大
③教育観の更新	これまでの教育実践を内省し、新たな教育観を構築
④国内外の教職員同士のつながりの重要性認識	国内外に広がるネットワークが教職員を相互に励まし合い、成長を促す
⑤国際交流に対する意欲向上	国際交流・国際理解教育への強い関心・意欲、世界平和への意識の高まり
⑥相手国への関心・理解の向上	文化・教育への理解向上、親近感の高まり

表5 内面の変化

以上より、本プログラムは、教職員自身の価値観及び教育観を更新し、国際理解・平和・共生を理念ではなく実践として教育現場に還元しようとする意欲と責任感を育む契機となっていることが確認できる。

同様に、具体的な行動の変化に関する自由記述（Q8）を分析したところ、以下の5つのカテゴリーに整理でき、参加者の広範囲かつ持続的な実践行動の変化が明らかになった。

行動の変化の類型	具体的な行動の変化
①国際交流の新規実施・拡大	海外の学校とのオンライン・対面交流の開始、既存交流の質向上・定期化、個人レベルの関係を学校間交流へ発展、学校間国際交流の仲介
②授業・教育実践への反映	プログラムで得た知見を授業・探究学習・総合学習に反映、多文化・多角的な視点（マイノリティの視点）の導入、国際的視野を意識した指導の増加、国際理解・平和・SDGs・ESDを扱う授業実践の拡充
③校内・地域・外部への発信	校内研修や職員会議での成果共有、教育委員会・校長会・地域等での実践報告、他校・同僚教職員への助言・支援
④ネットワーク形成と協働	海外教職員やプログラム参加者との継続的な交流、国内外の教職員ネットワークを活用した相談・協働、大学・国際機関等との連携強化
⑤自己研鑽・キャリア行動	語学学習の開始・再開、海外派遣・在外教育施設勤務への応募、国際研修・関連研修への積極的参加、海外訪問・教育視察の計画・実行

表6 行動の変化

II.周囲への影響

さらに、周囲にもたらすことができた影響に関する自由記述（Q10）からは、以下の①～⑤の観点から周囲への影響が示唆された。主な内容は以下の通りである。

① 生徒の内面・行動の変容に対する影響
特定国・地域への固定的イメージの見直しや異文化理解及び寛容性の高まりがみられたとの記述があった。あわせて、自主的な外国語学習や海外交流・留学への関心の高まり等、主体的な行動の変化や自己効力感及び挑戦意欲の向上が示唆され、学びを実践へと発展させた事例が報告された。

② 同僚教職員の意識改革と教育実践に対する影響
国際教育への関心及び理解の広がりとともに、海外研修・国際交流への参加意欲の向上やプログラム応募・参加の連鎖が報告された。また、多角的視点やSDGs・ESD・多文化共生の観点を取り入れた授業実践等、教育実践の変容がみられ、ロールモデルとして他の教職員の挑戦意欲及び行動変化の促進につながったとの認識が示された。

③ 学校組織・制度への波及「国際交流の学校文化への定着と組織的展開」
国際交流が学校全体の教育活動として位置づけられ、校内協力体制の強化が報告された。さらに、国際交流クラブの新設や韓国語選択科目の設置、海外校との協定締結及び定期的交流の実施等、制度化及び継続的運営の進展が示唆され、学校の教育目標の具体化につながった事例が挙げられている。

④ 家庭・地域社会への広がり
家族の語学学習の開始や異文化への親近感の醸成、学校の国際的な教育活動による学校への信頼感及び共感の向上につながったとの認識が示されている。さらに、新聞・学校だより・HP・ケーブルテレビ等を通じた情報発信や、大学・教育委員会・国際団体との連携深化等、地域と学校の接続及び相互作用の強化が報告された。

⑤ 国際交流を通じた関係性の持続的発展及び学びの循環
教職員及び学校間の継続的交流や共同実践が展開され、体験に基づく「生の声」による対話や共有を通じて価値観の変容が示唆された。さらに、個人の学びが周囲へと共有されることで組織及び地域へと段階的に波及し、学びが連鎖的に循環、発展していく構造が創出されている。

III.本プログラムの社会的インパクト

最後に、参加者の視点から本プログラムの社会的インパクト（Q11）を整理する。紙幅の制約上、分析の詳細は割愛するが、本プログラムの社会的インパクトとしては「国際理解の深化」、「学校教育における国際的な活動・視点の日常化」、「地域社会と学校の連携を通じた地域からの評価向上」、「社会的及び時間的に広がる波及効果」といったキーワードが挙げられた。参加教職員の国際的な視野及び教育観への影響を契機として、国際交流や多文化理解を日常の教育活動や学校文化の中に位置づける実践が生み出され、学校が地域の国際交流の拠点として機能しているとの認識も示されている。

さらに、「2018-19年度」に得られた回答（n=32）と、「2023-24年度」に得られた回答（n=71）の定量的な傾向を比較した結果、内面・行動・周囲への影響（Q5、7、9）のいずれにおいても統計的な有意差は見られなかった（Q5: $t(47.18) = 1.06$, $p = 0.29$ / Q7: $t(101) = 1.23$, $p = 0.22$ / Q9: $t(101) = 0.83$, $p = 0.41$ ）。これはすなわち、時間が経過してコーホートが変わっても、参加した教職員の回答傾向は変わらず、当初のプログラムの効果が維持されているということを暗示している。この持続性もこのプログラムの重要なインパクトであると言える。

IV.総括： ロジックモデルに立ち返って

2018年度からの本プログラムの総括評価として、本プログラムは、教職員の意識変容を起点として、国際理解・ESD・探究的な学びを学校教育の日常に根づかせる実践が広がり、国境と世代を越えた持続的な教育ネットワークの形成を通して、多層的かつ長期的な社会的インパクトを生み出していると考えられる。すなわち、事業のロジックモデルにおける上位アウトカムの達成に向けた進展と、参加教職員が学校及び地域におけるChange Makersとして機能していることが示唆された。112件の回答は、積極的な活動を行う教職員から寄せられたポジティブ・バイアスがかかっている可能性は否定できないが、少なくとも過去7年度にわたり、コロナ禍の苦境に晒されながらもこのプログラムが達成してきた成果は小さくないことが明らかになった。

資料1 令和7年度事業評価(海外教職員招へいプログラム) アンケート票

1	お名前
2	所属機関名
3	なぜこのプログラムに参加しようと思ったのですか？ 日本との交流に関心があったから／国際交流全般に関心があったから／活動内容・テーマに関心があったから／過去の参加者やその他関係者に勧められたから／その他
4	上記の質問で「その他」を選んだ方は具体的にご説明ください。
5	プログラムに参加した感想を教えてください。(自由記述)
6	一番印象的だった(良かったと感じる)活動を教えてください。(自由記述)
7	このプログラムに参加する前、日本についてどれくらい関心をお持ちでしたか？ とても強い関心／強い関心／まあまあ強い関心／どちらとも言えない／まあまあ弱い関心／弱い関心／とても弱い関心
8	このプログラムに参加した後の現在、日本についてどれくらい関心をお持ちですか？ とても強い関心／強い関心／まあまあ強い関心／どちらとも言えない／まあまあ弱い関心／弱い関心／とても弱い関心
9	このプログラムに参加する前、日本の教育についてどれくらいのことをご存知でしたか？ とてもよく知っていた／ある程度知っていた／どちらともいえない／あまり知らなかった／全く知らなかった
10	このプログラムに参加した後の現在、日本の教育についてどれくらいのことをご存知ですか？ とてもよく知っている／ある程度知っている／どちらともいえない／あまり知らない／全く知らない
11	このプログラムに参加する前、国際交流や国際理解についてどれくらい関心をお持ちでしたか？ とても強い関心／強い関心／まあまあ強い関心／どちらとも言えない／まあまあ弱い関心／弱い関心／とても弱い関心
12	このプログラムに参加した後の現在、国際交流や国際理解についてどれくらい関心をお持ちですか？ とても強い関心／強い関心／まあまあ強い関心／どちらとも言えない／まあまあ弱い関心／弱い関心／とても弱い関心
13	以下の記述についてどう思いますか？ ① このプログラムを通して、日本の先生たちとのネットワークができた、あるいは広がったと感じる。 とてもそう思う／そう思う／どちらかと言えばそう思う／どちらとも言えない／どちらかと言えばそう思わない／そう思わない／全くそう思わない ② このプログラムを通して、自国の先生たちとのネットワークができた、あるいは広がったと感じる。 とてもそう思う／そう思う／どちらかと言えばそう思う／どちらとも言えない／どちらかと言えばそう思わない／そう思わない／全くそう思わない ③ このプログラムで学んだことを自分の学校の教育活動に応用したい。 とてもそう思う／そう思う／どちらかと言えばそう思う／どちらとも言えない／どちらかと言えばそう思わない／そう思わない／全くそう思わない ④ この経験を自分の学校の同僚と共有したい。 とてもそう思う／そう思う／どちらかと言えばそう思う／どちらとも言えない／どちらかと言えばそう思わない／そう思わない／全くそう思わない ⑤ 自分の学校で国際交流プログラムを新たに立ち上げたり、促進したりしたい。 とてもそう思う／そう思う／どちらかと言えばそう思う／どちらとも言えない／どちらかと言えばそう思わない／そう思わない／全くそう思わない ①から⑤の中で、一番強く思うものはどれですか？ ① / ② / ③ / ④ / ⑤
14	プログラムへの参加を経て、あなたが考える「『あたらしい』学び」について教えてください。
15	プログラムへの参加を経て、あなたが考える「新時代に求められる教職員像」について教えてください。
16	プログラム参加後に、教師として・個人として、何か内面的な変容がありましたか？(自由記述) どんな些細な事でも構いません。具体的な内容を教えてください。
17	この交流プログラムは継続するべきだと思いますか？ とてもそう思う／そう思う／どちらかと言えばそう思う／どちらとも言えない／どちらかと言えばそう思わない／そう思わない／全くそう思わない

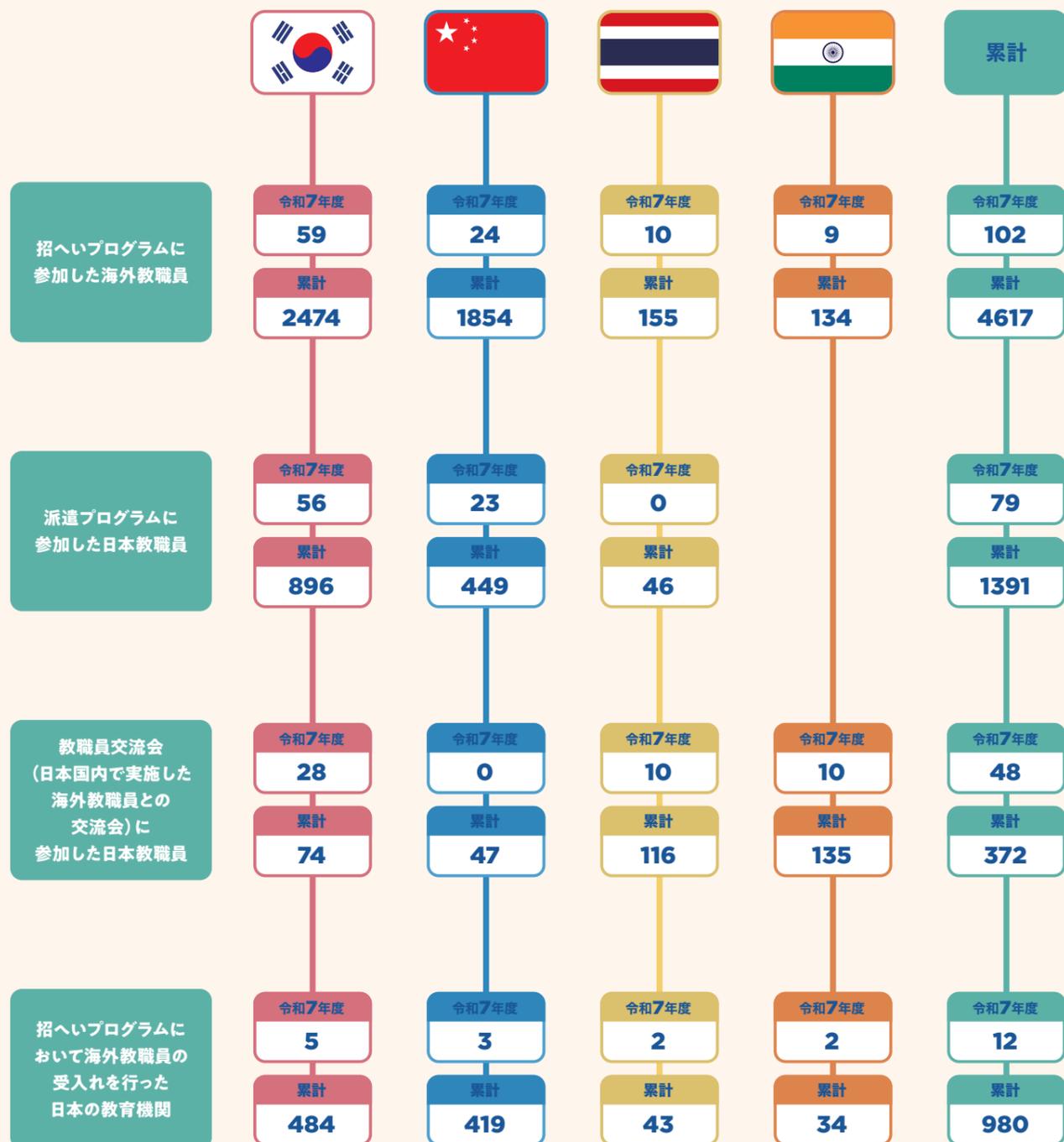
資料2 2018年度以降の参加者を対象としたインパクト評価 アンケート票

Q1	参加したプログラム
Q2	参加した年度
Q3	参加した当時の所属機関
Q4	参加した当時の役職
Q5	プログラム参加後、ご自身の考えや内面に変化はありましたか？ とてもそう思う／そう思う／どちらかと言えばそう思う／どちらとも言えない／どちらかと言えばそう思わない／そう思わない／全くそう思わない
Q6	1つ前の質問について、どのような考えや内面の変化があったのかを具体的に教えてください。どんなに些細なことでも構いません。
Q7	プログラム参加後、ご自身の行動に変化はありましたか？ とてもそう思う／そう思う／どちらかと言えばそう思う／どちらとも言えない／どちらかと言えばそう思わない／そう思わない／全くそう思わない
Q8	1つ前の質問について、どのような行動の変化があったのかを具体的に教えてください。
Q9	プログラム参加後、ご自身の周りの人々の考え方や行動に影響を与えたと思いますか？(児童・生徒、同僚、地域社会、友人、家族等) とてもそう思う／そう思う／どちらかと言えばそう思う／どちらとも言えない／どちらかと言えばそう思わない／そう思わない／全くそう思わない
Q10	1つ前の質問について、どのような影響を与えたか教えてください。具体的なエピソードや例があれば併せてご記入ください。
Q11	このプログラムには、ご自身の内面や行動の変化に留まらない、長期的な社会的価値(社会的インパクト、広く社会にもたらされる波及効果や影響)があると思いますか。あるとしたら、それはどのようなものですか？
Q12	参加後、プログラムで得た学びやネットワークを活かした活動として実践したことがあれば教えてください。
Q13	今後、ACCUに期待するサポートやご要望、その他お気づきの点がございましたら、ご自由にご記入ください。



これまでの事業参加者・機関数

事業開始以降、延べ6380名の教職員が各種プログラムに参加するとともに、980機関の協力を得て、国際的な教育交流のネットワークを構築してきました。



参加者の人数には、オンラインでの参加も含まれます。
数値は、2026年3月現在のものです。

令和7年度事業参加者のデータ

派遣プログラム参加者 (日本教職員)

参加者の学校種

学校種	人数(名)
小学校	27
中学校	16
義務教育学校・小中一貫校	1
中等教育学校・中高一貫校	7
高等学校	25
特別支援学校	3
教育委員会	0

参加者の役職

役職	人数(名)
校長	5
副校長・教頭	4
教諭	68
養護教諭	2

招へいプログラム参加者 (海外教職員)

参加者の学校種

学校種	人数(名)
小学校	20
中学校	22
義務教育学校・小中一貫校	0
中等教育学校・中高一貫校	0
高等学校	40
特別支援学校	4
教育委員会	4
その他	12

歓迎夕食会での集合写真
(中国派遣)



故宮博物院見学
(中国派遣)

日本教職員の海外への派遣プログラム

韓国政府日本教職員招へいプログラム

日本教職員を韓国に派遣する本プログラムは、2003年より文部科学省及び国際連合大学の協力のもとで実施されてきました。2005年からは、韓国教育部及び韓国ユネスコ国内委員会（KNCU）により実施されています。今年度は、日韓外交正常化60周年及び本プログラム開始25周年に当たる節目の年であり、これまでの歩みと成果を振り返り、今後の発展を展望するフォーラムを組み込んだ特別な構成で済州島にて実施されました。

日付	活動	開催地・開催形式
6月28日(土)	第1回事前オリエンテーション（ACCU主催） ・文部科学省による「韓国の教育事情」についての講義 ・過去の参加者による経験談・アドバイス	オンライン
7月4日(金)	第2回事前オリエンテーション（KNCU主催） ・韓国教育部による「韓国の教育事情」についての講義 ・訪問機関からの歓迎の言葉	オンライン
7月13日(日)	出発前オリエンテーション ・プログラム説明 ・出し物・文化授業の準備	和歌山県
7月14日(月)	出国（関西国際空港→済州国際空港） 開会式・歓迎夕食会	大阪府・韓国済州道
7月15日(火)	【Aグループ】 Samsung Girls' High School（サムスン女子高等学校）訪問 Kkumkiolla Career Experience Center（クムキオレ進路職業体験センター）訪問 【Bグループ】 Pyoseon High School（ピョソン高等学校）訪問 Jeju Multicultural Education Center（済州多文化教育センター）訪問	韓国済州道
7月16日(水)	【Aグループ】 Bomok Elementary School（ボモク小学校）訪問 Seogwipo Student Culture Center（西帰浦学生文化院）訪問 ホームビジット 【Bグループ】 Inhwa Elementary School（インファ小学校）訪問 Jeju Institute of Convergence Science & Research（済州融合科学研究院）訪問 ホームビジット	韓国済州道
7月17日(木)	Seongsan Ilchulbong（城山日出峰）訪問 Jeju World Natural Heritage Center（済州世界自然遺産センター）訪問 Jeju 4.3 Memorial Hall（済州4.3平和記念館）訪問	韓国済州道
7月18日(金)	A・Bグループ間共有セッション 日韓教師対話25周年記念教師フォーラム	韓国済州道
7月19日(土)	日韓教師対話25周年記念教師フォーラム Jeju Haenyeo Museum（済州海女博物館）訪問	韓国済州道
7月20日(日)	フォローアップアクションプランの発表及び閉会式 帰国（済州国際空港→関西国際空港）	韓国済州道・大阪府
8月26日(火)	第1回フォローアップミーティング	オンライン
2026年 2月7日(土)	第2回フォローアップミーティング	オンライン

参加者の所属機関

四国中央市立中之庄小学校	江田島市立大柿中学校
奈良市立一条高等学校附属中学校	田辺市立本宮中学校
沖縄市立美里中学校	北海道倶知安高等学校
長野県野沢北高等学校	橿原市立晩成小学校
たつの市立龍野東中学校	板橋区立緑小学校
長野県上田染谷丘高等学校	長崎県立西陵高等学校
久喜市立鷲宮東中学校	石垣市立登野城小学校
宮城県立光明支援学校	宮城県西都市立穂北小学校
日野市立日野第七小学校	長野県長野吉田高等学校
長野県上田高等学校	鹿児島修学館中学校・高等学校
関西学院大学千里国際中等部高等部	佐渡市立南佐渡中学校
八千代市立みどりが丘小学校	長野県小諸高等学校
新潟県村上市立岩船小学校	東京科学大学附属科学技術高等学校
埼玉県立岩槻はるかぜ特別支援学校	田辺市立上芳養中学校
佼成学園女子中学高等学校	宮城県塩釜高等学校
浪速高等学校	大東市立大東中学校
大阪府立泉北高等支援学校	唐津市立浜崎小学校
群馬県立尾瀬高等学校	兵庫県立農業高等学校
北海道美瑛町立美瑛小学校	愛媛県立北条高等学校
東大阪市立上小阪小学校	小平市立小平第五小学校
愛知県立丹羽高等学校	千葉県立松戸国際高等学校
愛知県立加茂丘高等学校	中央区立佃島小学校
日本体育大学柏高等学校	出水市立出水商業高等学校
町田市立小山小学校	大阪府立鶴見商業高等学校
箕面市立彩都の丘学園	
板橋区立中台小学校	
北海道八雲町立東野小学校	
苫小牧市立ウトナイ小学校	
上越市立八千浦中学校	
松本市立明善中学校	
倉敷市立万寿小学校	
明石市立朝霧中学校	

世界自然遺産
城山日出峰の視察
（韓国派遣）



中国政府日本教職員招へいプログラム

日本と中国との間の教職員国際交流事業は、2002年に中国から初等中等教職員を招へいしたことを契機に開始され、2003年からは、日本の初等中等教職員が中国を訪問するプログラムも実施してきました。今年度のプログラムは、中国教育部及び中国教育国際交流協会の協力のもと実施され、北京市及び天津市を訪問しました。

日付	活動	開催地・開催形式
10月10日(金)	事前オリエンテーション ・文部科学省による「中国の教育事情」についての講義 ・過去の参加者による経験談・アドバイス	オンライン
10月19日(日)	出発前オリエンテーション ・プログラム説明 ・出し物の準備	東京都
10月20日(月)	出国(羽田空港→北京首都国際空港) 北京経済技術開発区訪問 歓迎会	東京都・中国北京市
10月21日(火)	中国教育部訪問 北京市月壇中学(北京市月壇中学)訪問	中国北京市
10月22日(水)	北京第一实验学校(北京第一実験学校)訪問 故宮博物院(故宮博物院)訪問	中国北京市
10月23日(木)	科大讯飞(科大訊飛)訪問 天津へ移動	中国北京市・天津市
10月24日(金)	天津外国語大学附属外国語学校(天津外国語大学附属外国語学校)訪問 南开大学(南開大学)訪問 南开大学附属小学(南開大学附属小学校)訪問 移動(天津→北京) 歓送会	中国天津市・北京市
10月25日(土)	首都博物館(首都博物館)訪問 帰国(北京首都国際空港→羽田空港)	中国北京市・東京都
12月19日(金)	フォローアップミーティング	オンライン

参加者の所属機関

江戸川区立江戸川小学校	大阪市立玉造小学校
文京学院大学女子中学校高等学校	山形県立東桜学館中学校
茨城県立並木中等教育学校	大阪市立中央小学校
兵庫県立吉川高等学校	西之表市立現和小学校
千葉県立稲浜中学校	鹿児島市立谷山北中学校
調布市立調布中学校	山梨県立甲府第一高等学校
茨城県立那珂湊高等学校	神奈川県立横浜国際高等学校
茨城県立牛久栄進高等学校	笛吹市立春日居小学校
大阪市立塩草立葉小学校	兵庫県立姫路商業高等学校
豊田市立高岡中学校	石垣市立野底小学校
江南市立古知野東小学校	筑波大学附属高等学校
廿日市市立金剛寺小学校	

海外教職員の日本への招へいプログラム

韓国教職員招へいプログラム

日付	活動	開催地・開催形式
10月24日(金)	オリエンテーション① ・プログラム説明 ・文部科学省による「日本の初等中等教育の概要」についての講義	オンライン
11月3日(月・祝)	出国(仁川国際空港→成田国際空港) オリエンテーション② 歓迎夕食会	千葉県
11月4日(火)	【Aグループ】八千代市立大和田南小学校訪問 【Bグループ】麴町学園女子中学校・高等学校訪問	千葉県・東京都
11月5日(水)	【Aグループ】八千代市立大和田中学校訪問 ホームビジット 【Bグループ】麴町学園女子中学校・高等学校訪問 早稲田大学訪問	千葉県・東京都
11月6日(木)	【Aグループ】セントラルスポーツ生涯学習プラザ・八千代市立萱田南小学校訪問 成田山新勝寺訪問 【Bグループ】板橋区立上板橋第二小学校訪問 ホームビジット	千葉県・東京都
11月7日(金)	振り返りミーティング 日韓学校間交流実践事例発表・日本文化体験(木目込人形制作)	千葉県
11月8日(土)	日韓教職員交流会 東京学芸大学 岩田康之教授による講義	千葉県
11月9日(日)	帰国(成田国際空港→仁川国際空港)	千葉県
2026年2月7日(土)	フォローアップミーティング	オンライン

参加者の所属機関

Kyunghee Girls' Middle School	Namhae High School
Samsung Girls' High School	Andong Yeongmyeong School
Nam Sung Girls' High School	Wongok Middle School
Yonggang Middle School	Dogae High School
Sung Shin High School	Daejeon Goejeong High School
Samri Elementary School	Wonhwa Girls' High School
Songhyun Girls' High School	Seomgang Elementary School
Busan Sungwoo School	Sungsim School for the Deaf
Gwangju Metropolitan City Office of Education	Gwansan Middle School
Bokwang Middle School	Sejong Global High School
Busan International Middle School	Youngil High School
Changwon Yongho High School	The Attached Elementary School of Gongju National University of Education
Jingyeong Girls' High School	Pyoseon High School
Bomok Elementary School	Gunbook Elementary School
Sungil Information High School	Jeju Special Self-Governing Provincial Office of Education
Paldal Elementary School	Gyeongju Hwarang High School
Jeonju Shinheung Middle School	Jeonju Geunyeung Middle School
Guksan Elementary School	Hwikyung Girls' Middle School
Wabu High School	Bosung Girls' Middle School
Poongmoon High School	Geundeok Elementary School
Jeodong Elementary School	Gimhae Yulha High School
Incheon Cheongna Middle School	Sanjayeon Middle School
Kyongdug Middle School	Bojeoung High School
Cheolseong High School	Shimwon High School
Saemmaru Elementary School	Ministry of Education
Nonsan Daejeon High School	Korean National Commission for UNESCO
Inhwa Elementary School	
Taejeon High School	

中国教職員招へいプログラム

日付	活動	開催地・開催形式
9月9日(火)	事前オリエンテーション ・プログラム説明 ・文部科学省による「日本の初等中等教育の概要」についての講義	オンライン
9月16日(火)	出国(上海浦東国際空港→仙台空港) 松島訪問 歓迎夕食会	宮城県
9月17日(水)	富谷市立富谷第二中学校訪問 ホームビジット	宮城県
9月18日(木)	富谷市教育委員会訪問	宮城県
9月19日(金)	鹽竈神社訪問 塩竈市津波防災センター訪問 宮城県塩釜高校訪問	宮城県
9月20日(土)	宮城教育大学訪問 ・市瀬智紀教授による講義 東北大学訪問 ・ナカサト ローレン助教による講義 ・中国人留学生との交流会	宮城県
9月21日(日)	震災遺構 仙台市立荒浜小学校訪問 かわまちてらす閑上訪問 東京へ移動	宮城県・東京都
9月22日(月)	帰国(羽田空港→北京首都国際空港)	東京都

参加者の所属機関

Wuxi No.1 High School (无锡市第一中学)

International Center for Education Exchange of Guizhou Provincial Department of Education (贵州省教育国际交流中心)

Zunyi Institute of Educational Sciences (遵义市教育科学研究院)

Tongren Municipal Education Bureau (铜仁市教育局)

Guizhou University High School (贵州大学附属中学)

The Middle School Attached to Guizhou Normal University (贵州师范大学附属中学)

Guizhou Experimental Middle School (贵州省实验中学)

Mingyuan Middle School, Guanshanhu District (观山湖区铭苑中学)

Department of Basic Education, Jiangsu Provincial Department of Education (江苏省教育厅基础教育处)

Suzhou No.1 High School of Jiangsu Province (江苏省苏州第一中学校)

Suzhou High School of Jiangsu Province (江苏省苏州中学校)

Suzhou No.10 High School of Jiangsu Province (江苏省苏州第十中学校)

High School Affiliated to Nanjing Normal University (南京师范大学附属中学)

Nanjing Municipal Healthcare Institute for Primary and Secondary Schools (南京市中小学卫生保健所)

Wuxi Jiangnan Middle School (无锡市江南中学)

Changsha Experimental Primary School (长沙市实验小学)

Changshashi Xiangjun Peicui Experimental Middle School (长沙市湘郡培粹实验中学)

Nanya Meixihu Middle School, Changsha (长沙市南雅梅溪湖中学)

No.1 Middle School of Anhua (安化县第一中学)

Taojiang No.1 Senior High School (桃江县桃花江镇第一中学)

Xiangxi Zizhizhou Rongjiang Middle School (湘西土家族苗族自治州溶江中学)

No.1 Middle School in Luxi, Hunan (湘西土家族苗族自治州泸溪县第一中学)

Ministry of Education (教育部)

China Education Association for International Exchange (中国教育国际交流协会)

タイ教職員招へいプログラム

日付	活動	開催地・開催形式
9月25日(木)	タイ教職員対象オリエンテーション① ・プログラム説明 ・文部科学省による「日本の初等中等教育の概要」についての講義	オンライン
9月26日(金)	日本教職員対象オリエンテーション	オンライン
9月30日(火)	入国(スワンナプーム国際空港→羽田空港) タイ教職員対象オリエンテーション②	東京都
10月1日(水)	新宿区立愛日小学校訪問	東京都
10月2日(木)	墨田区立文花中学校訪問	東京都
10月3日(金)	東京学芸大学訪問 ・岩田康之教授による講義 東京国立博物館訪問	東京都
10月4日(土)	日タイ教職員交流会	東京都
10月5日(日)	日本での活動の振り返り	東京都
10月6日(月)	帰国(羽田空港→スワンナプーム国際空港)	東京都
2026年 3月7日(土)	フォローアップミーティング	オンライン

参加者の所属機関

Maptaputphanpittayakarn School

Banklongmanao School

Nakhon Pathom School for the Deaf

Bannakhok School

Bankhoksung School

Pasakpangmai School

Khuankhanun School

Triamudomsuksapattanakarn Ubonratchathani School

Saluang Phittayakom School

Ministry of Education

松島での集合写真
(中国招へい)東京学芸大学での講義
(タイ招へい)

インド教職員招へいプログラム

日付	活動	開催地・開催形式
10月11日(土)	「日印教育交流会」事前ミーティング(日本教職員対象) ・プログラム説明 ・びわこ学院大学 教育福祉学部子ども学科 渡辺雅幸准教授による「インドの教育事情」に関する講義	オンライン
11月1日(土)	インド教職員対象オリエンテーション① ・プログラム説明 ・文部科学省による「日本の初等中等教育の概要」についての講義	オンライン
11月17日(月)	入国(インディラ・ガンディー国際空港→羽田空港) インド教職員対象オリエンテーション② 駐日インド大使館訪問 群馬県へ移動	東京都・群馬県
11月18日(火)	群馬県立尾瀬高等学校訪問(1日目) ホームビジット	群馬県
11月19日(水)	群馬県立尾瀬高等学校訪問(2日目) 華道見学	群馬県
11月20日(木)	吉祥寺訪問 川場田園プラザ訪問 TUMO Gunma訪問	群馬県
11月21日(金)	埼玉県立春日部高等学校訪問	埼玉県
11月22日(土)	日印教育交流会 ・東京学芸大学大学院 教育学研究科 成田喜一郎個人研究員によるワークショップ ・文化交流	東京都
11月23日(日)	帰国(羽田空港→インディラ・ガンディー国際空港)	東京都
2026年 1月10日(土)	フォローアップミーティング	オンライン

参加者の所属機関

Government High School, Dasgrain

Composite School Chakiya, Nindura Barabanki
225302

Shree Raja Rammohanray Pri School No 94

Composite School Godhauri, Mahmudabad, Sitapur

Delhi Public School, Nacharam

Government Model School, Nayagram Block

MES Boys' High School, Yakutpura

Government Senior Secondary School Mamring

Centre for Environment Education



日印教育交流会(インド招へい)

協力機関・関係者(敬称略)

令和7年度 招へいプログラム受入れ機関

●韓国教職員招へいプログラム

八千代市教育委員会
八千代市立大和田南小学校
八千代市立大和田中学校
麴町学園女子中学校・高等学校
板橋区立上板橋第二小学校

●中国教職員招へいプログラム

富谷市教育委員会
富谷市立富谷第二中学校
宮城県塩釜高等学校

●タイ教職員招へいプログラム

新宿区立愛日小学校
墨田区立文花中学校

●インド教職員招へいプログラム

群馬県立尾瀬高等学校
埼玉県立春日部高等学校
群馬県庁 産業経済部 eスポーツ・クリエイティブ推進課
クリエイティブ人材育成室

プログラム協力専門家

宮城教育大学 教育学部国際教育領域 教授 市瀬智紀
東京学芸大学 先端教育人材育成推進機構 教授 岩田康之
東北大学 教育学研究科 助教 ナカサト ローレン
東京学芸大学大学院 教育学研究科 個人研究員 成田喜一郎
びわこ学院大学 教育福祉学部子ども学科 准教授 渡辺雅幸

プログラム関連機関

文部科学省(MEXT)
大臣官房国際課 国際協力企画室

●海外協力機関

韓国教育部
韓国ユネスコ国内委員会(KNCU)
中国教育部
中国教育国際交流協会(CEAIE)
タイ教育省
インド教育省
国際NGOインド環境教育センター(CEE)

事業実施運営機関

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター(ACCU)
国際教育交流部

文部科学省委託 令和7年度 新時代の教育のための国際協働プログラム 初等中等教職員国際交流事業 実施報告書

令和8(2026)年3月

編集・発行 公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター(ACCU)

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 1-32-7F 出版クラブビル

電話 03-5577-2853

Email exchange@accu.or.jp

URL https://www.accu.or.jp/

本報告書は、文部科学省委託事業として、公益財団法人ユネスコ・アジア文化センターが実施した「新時代の教育のための国際協働プログラム(初等中等教職員国際交流事業)」委託事業の成果を取りまとめたものです。従って、本報告書の複製、転載、引用等には文部科学省の承認手続きが必要です。

